《短評２》
【タイトル】
現実を凌駕する想像力の衝撃

【書誌】
パリデギ
脱北少女の物語
黄晳暎（ファン・ソギョン）著
青柳優子訳
●岩波書店
●2008 年 12 月
●270 頁
●2415 円（定価）

【本文】
　衝撃の世界小説である。
　主人公の少女「パリデギ＝捨てられし者」は脱北する。清津から延吉、大連、そして蛇頭の手を経てロンドンへと流れるあいだ、つかの間の幸せ、やさしい家族、大好きな犬から静かに、けれども次々と引き離されていく。周りの風景は哀しいメリー・ゴーランドのようだ。北朝鮮の飢餓、中国の人身売買や密航ギャング、英国のムスリム共同体、九・一一、イラク戦争、グァンタナモ、ロンドン同時テロ……。そのなかにあって、主人公パリデギは捨てられし者であるのと同時に、巫女の血を引くパリ王女（王女にルビ：デギ）でもあり、祖母や犬の魂の声と対話しながら、憎しみを静める。
　小説家の持つ想像力は、時に現実を楽々と超えていく。かつて冷戦時代、左右／学問実務を問わず、多くの人間が東西対立を月や川のように実体視し、不変のものとして考えていたとき、ある作家は、鉄のカーテンもカーテンなら開けるときにはさっさと開けておしまい、と言ってのけた。こうして想像は現実（主義）をときに凌駕する。
　韓国を代表する作家の黄晳暎の想像力にもそうした自由がある。燃え上がるような憤怒とほのかな許しの地勢図を落ち着いた筆致でたどりながら、国境の持つ断絶、そこに宿る搾取と絶望を、にもかかわらず越境して存在する希望の糸で紡いでゆく。文明もしかり。ムスリム男性と結婚し、どこかでつながる神について義理の父と共鳴する。南アフリカのズールー族の呪術師との交信は、やがて許しにいたる。
　週末に映画鑑賞気分で堪能できる。日本語訳はこなれており、スムースである。悲しい出来事があまりに滑らかに淡々と綴られる分だけ、悲哀は深く、希望はかすかだ。ぜひ一読をお薦めしたい好著である。